Mini Interview

本尊のある生活②

南無阿弥陀仏の「場」が道場

山西睦子さん（大和仏教センター主宰）
1953年奈良県生まれ。中学校教員を退職後、2004年より大和仏教センター主宰。

――大和仏教センターのこれまでの歩みについて教えてください。

父の岡本精一と母の禮子は共に暁鳥敏先生の会座で聞法するなかで出会い、結婚したので、私も小さな頃から先生のご自坊、明達寺にはよく連れられて行きました。私が生まれたとき、先生から電報が来て「人の世に睦まじくあれ」という願いで名づけられたと聞いています。両親は2人とも奈良で教員として勤め、1970年、自宅のはなれに「大和仏教文化センター」を立ちあげました。そこで日曜学校や文化講座を開き、さまざまな先生を年に数回お呼びして聞法する生活で、私も手伝っていました。2004年に建て替え、現在の建物になったのですが、かつてのような文化講座はもう必要ないと思い、聞法の道場として「大和仏教センター」の名のもと、新たな一歩をふみ出すことになりました。

明達寺の会座には当時さまざまな方がおられ、今にして思えば、そこにあったサンガ*の空気に自然と育てられました。しかし、私が自分のこととして聞法に向き合うようになったのは、父が1993年に、母が2015年になくなるのを経てのことです。両親の道場をどう引き継いでいくか考えたとき、私たちはお寺でも組織でもないとあらためて気づきました。ある方に相談したところ、「禮子さんは「場」が人を育てると言っていた。教えを聞きたいという思いがあれば十分では？」と背中を押され、私と主人が聞法する場に数人を招待することならできる、と思いました。自宅の道場といっても、屋台みたいなものです（笑）。

――現在は月一回、聞法会を開いておられますね。

両親はごく自然に本尊に手を合わせていました。私も聞法によって南無阿弥陀仏という本尊のいわれを深めていきたいのです。私には仏法を語る力はありませんが、聞法は誰でもできる。本尊があり、教えを語ってくださる方がいて、たとえ数人でも共に聞いてくださるなら、そこは自宅でも道場になると思います。

*仏弟子たちの集まり。

大和仏教センター（奈良県橿原市）の外観。外の掲示板は道行くひとに親しまれている

取材当日はマイケル・コンウェイ氏（大谷大学准教授）の法話があり、10数名が教えに耳を傾けた

大和仏教センター玄関にて山西睦子さん（写真右）。お連れ合いの賢次さん（写真左）もセンターの活動をサポートする